

「御国を受け継ぎなさい」－マタイによる福音書講解説教 102－

ダニエル書 第12篇 1節～4節  
マタイによる福音書 第25章 31節～46節

説教 岡村 恒 牧師

「正しい者は永遠の生命に入るであろう」。(46節) 主イエスのたとえ話です。終わりの日に、羊飼いが羊とやぎを右と左に分けるように、すべての人が分けられるのです。確かに、「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来る時」(31節)が来るのです。

それは、すべての人がもれなく喜び日ではありません。右と左に分けられてしまう日です。そのため、今日のたとえ話だけを読んで、良い業に励んで生きようとする人もいます。しかし聖書を丁寧に読めば、私たちの誰かが羊として右に選り分けられることなど、本来あり得ないことは明らかです。

神が聖なるお方であり、義なるお方だからです。終わりの日には、正しい《さばき》が実行されるのです。主イエスが「かしこより来りて、生ける者と死ねる者とを審きたまはん」(使徒信条の一節)と私たちが告白しているのはそういうさばきの話です。

良い事をして人生を送り、終わりの日には天国に入りたいと願いながら努力して歩んでいる人は、教会の内外に大勢います。実は、このたとえ話に出てくる善行は、ユダヤ教の律法に規定された「当然すべき行い」でもあります。神を畏れ、律法を守って生きているユダヤ人であれば、『主よ、いつわたしたちはそうしなかったでしょうか』と申し開きができるはずでした。また、多くの宗教や知恵が、こういう良い事をして生きるようにと勧めています。そして、良い業に失敗した時にはそれを償う方法も用意します。そうして、終わりの日には何とか右側に分けられるように歩めと皆に勧めるのです。

ところが今日のたとえ話を読むと、右に分けられた人々は『主よ、いつわたしたちはそのようなことをしたでしょうか』と、無自覚、無意識だったのです。実に彼らは、『主よ、わたしは、あなたに喜ばれるようなことは何ひとつしていません。わたしがあなたの祝福を受けることなあり得ないのです』と告白するのです。

彼らは、自分がどれほど神から遠く離れ、神の義の前でどれほど汚れているかを知っていません。ですから『主よ、いつわたしが』と立ち止まり、主に問いかけるのです。一方で左側の人々は、確かに良い業を積み重ねてきたかも知れませんが、ただ一つのことを欠いていました。全知全能の神を前にして、自分の人生のすべて

の瞬間を知り尽くしておられるお方を前にして、『いつわたしたちが…しなかったでしょうか』と反論するのです。「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず、…」と言う神の言葉に対して、『あなたの言っていることは真実ではない。わたしの方が正しい!』と言い返すのです。彼らは、神がどういうお方で、自分が何者かを少しも理解してはいないのです。

具体的な生活の姿がどのようなものであるかも、もちろん重要です。自分を愛するように隣り人を愛することに、私たちは命をかけます。しかしこれは、終わりの日、神の前に立った時、『あなたは良い忠実な僕だ。あなは私のものだ。』と神に言われて天国に入れられるために最も重要なことではありません。今から500年前、宗教改革者たちはこの真実を再発見しました。

まず神が私たちを御心に留め、愛し、ひとり子の命を代償にしてまで、死と滅びから取り戻し、永遠の生命を与えて下さった。これがまず最初に起こったことです。このことを信じる者が、右に分けられ、永遠の生命を得るのです。父なる神の御心は、御子を信じる者がひとりも滅びないで永遠の命を得ることです。この神の御心を聞いて、自分がこのような愛を受けるにふさわしくない者であることを知り、それでも神の約束に全身全霊を懸ける、これが信仰です。

聖書のもともとの言い方からすると、「小さな者」というのは、自分の小ささを知り、何一つ神の前に誇るものがないことを知る者のことです。マタイによる福音書18章で、一匹の羊を探し出す羊飼いの姿が語られました。「これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない。」(18節)とまで言われたことは、真実なのです。

具体的な愛の業も、もちろん私たちに託された大切な務めです。しかし愛の賛歌(コリント人への第一の手紙13章)にある通り、どんな大きな愛の業も、もし神の愛と無関係であれば、それは無に等しいのです。私たちの救いのためには、何の役にも立たないのです。

神は熱情の神です。私たち一人一人を探し求めて下さるお方です。この神の愛を知って生きるようにと、私たちは招かれています。今、神の招きに答えて、永遠の生命を頂いて生き始めましょう。

(記 岡村 恒)